

【2026 ワールドカップ・バクサー大会 3日目】

大会最終日となる3日目は、これまでの試技で得られた課題と成果を踏まえ、演技の完成度向上を目指して臨んだ。連戦の中での締めくくりとして、各選手が積み重ねてきた内容をいかに発揮できるかが問われる試合となった。

【団体】

《ボール5》 4位

得点：25.250 (DB 5.00 / DA 6.80 / A 7.40 / E 6.05)

演技全体として、落下を防ぐことはできたものの、冒頭のCR、シリーズ、中盤のCR、CC、R、終盤の交換において、受けの価値を取りきれない場面が複数見られた。加えて、複数投げにおいては距離不足が影響し、価値が認められない要因となった可能性が高い。結果として、全体を通して受けの精度不足が顕著となり、0.2点差でメダルを逃す結果となった。

他国においても同様に価値の取りこぼしが見られる中で差が生じていることから、最終的には演技全体の質および完成度の差が得点に影響していると考えられる。また、演技中に動きの緩みや隙が見られた点も課題であり、すべての動きを最後までやり切るエネルギーと集中力の強化が必要である。加えて、「和」の世界観をより明確に表現するための動きや動線の工夫も求められる。

〈出場選手〉

田口久乃

西本愛実

花村夏実

田中友菜

眞鍋凜

《フープ3クラブ2》 8位

得点：23.300 (DB 5.00 / DA 6.30 / A 7.40 / E 5.50 / P 0.9)

3連戦の最終種目となった本演技は、全体を通して安定性を欠き、終始落ち着かない内容となった。最初の交換の受け、3つ目の交換間の回転、終盤の交換の受け、さらにシリーズにおいて追加価値を取りきれない場面が見られた。

加えて、2つ目の交換および足投げを伴うCRにおいて投げが過大となり場外での受けとなったことに加え、その際に手具が床に触れたことでペナルティが重なり、合計0.9点の減点につながった。本種目については3大会を通して演技をまとめきることができておらず、特にパワーコントロールの不安定さが顕著な課題である。

新チームとして初めての国際大会であり、怪我人の影響により十分な練習量を確保できなかった状況から、安全性を考慮した構成で臨んだが、それでもなお演技をまとめきることができなかった点は大きな課題である。

また、身体難度の質においても世界との差が顕著であり、演技全体をまとめることに意識が向くあまり、細部の精度や質へのこだわりが不足していた。体力・技術・表現力のすべての側面において、国際レベルとの差が明確となる結果であった。

〈出場選手〉

田口久乃

西本愛実

花村夏実

田中友菜

三好初音

本大会を通じて、各国の中でも高い競技力を有するチームと、それ以外の層との間に明確な差があることが示された。その差は単なる難度の違いではなく、新体操としての基礎・基本に裏打ちされた身体操作の精度や質の積み重ねによるものであると考えられる。

加えて、表現においても、形として整えられたものではなく、身体から自然に溢れ出るようなエネルギーや躍動感が求められており、日本の持つ美しさに加え、その内側から発する力強さが融合したときに初めて作品としての完成度が高まり、評価へとつながることを改めて認識する結果となった。

団体は新チームとして3連戦を経験したが、いずれの試技においても納得のいく演技には至らなかった。一方で、各国との比較を通じて現状の立ち位置と、世界で戦う上で求められる水準の高さと厳しさを明確に認識する機会となった。本大会での経験は、今後の方向性を明確にする上で重要な意味を持つ。

今後、世界選手権に向けてWCCおよびワールドカップへの出場を予定しているが、それまでに、練習に対する意識の改革、求める基準の引き上げ、正確な身体操作の徹底、さらには熟練度に裏打ちされた表現力の向上など、あらゆる側面において質の向上を図る必要がある。チーム一丸となり、着実な強化を進めていきたい。

また、本大会を通じて、チーム内における競争の重要性和、高い基準を持ち続ける姿勢の必要性がより明確となった。今後は個々の成長とチーム全体の底上げを図るとともに、強化の過程において最適な編成を追求し、より高いレベルで戦うための体制構築に向けて取り組んでいく。